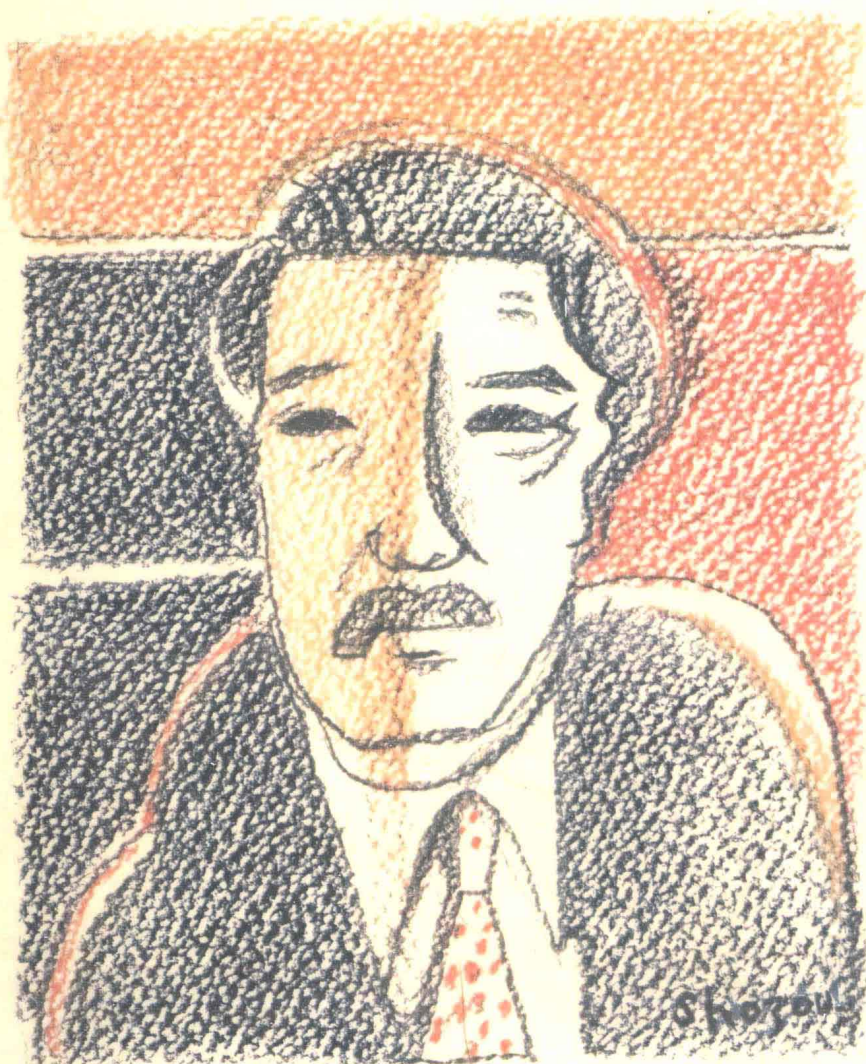


文芸読本

北原白秋



文芸読本 北原白秋 ©1978

初版発行 昭和五十三年九月二十六日

定価 六八〇円

0091-037835-0961

落丁・本乱丁本はお取替えいたします

発行者 佐藤皓三

発行所 株式会社 河出書房新社

〒102 東京都新宿区住吉町九五

電話 東京(三五五)五三一

振替 東京〇一〇八〇二

印刷 東洋印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

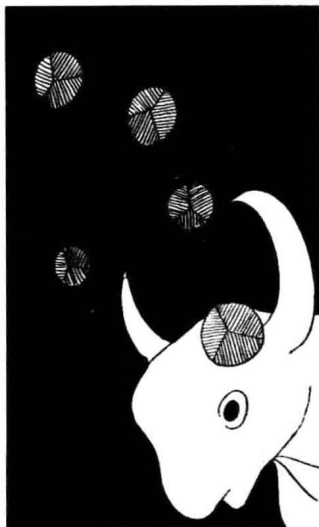
北原白秋アルバム



昭和16年8月



「思ひ出」ノート



雀の卵 挿絵(白秋画)



明治37年、早稲田の“三水”。左から北原射水、中林蘇水、若山牧水



明治36年、伝習館中学5年のとき、弟鉄雄(左)と



左から萩原銅太郎、白秋、
尾山篤二郎(大正4年頃)



山本鼎(右)と(明治43年)

前列左から鉄雄妻、菊子、隆太郎、父長太郎、三人おいて母シゲ、叔母、山本鼎妻家子、
後列三人目から白秋、弟鉄雄、一人おいて弟義雄、同妻(大正13年)

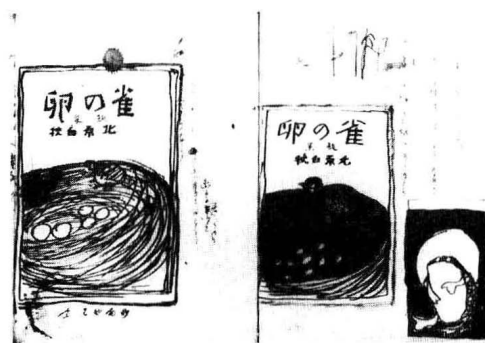




大正12年、小田原木兎の家前で(中央が白秋夫妻と隆太郎)



木兎の家の二階にて(大正13年)



白秋自筆 歌集『雀の卵』装幀スケッチ



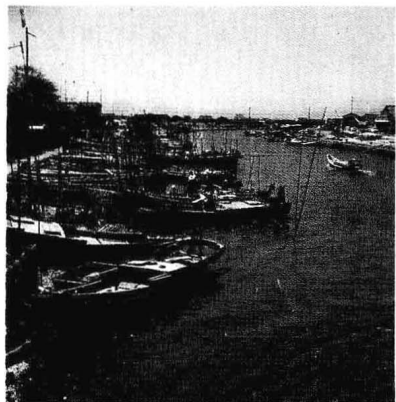
昭和2年、隆太郎、薫子と



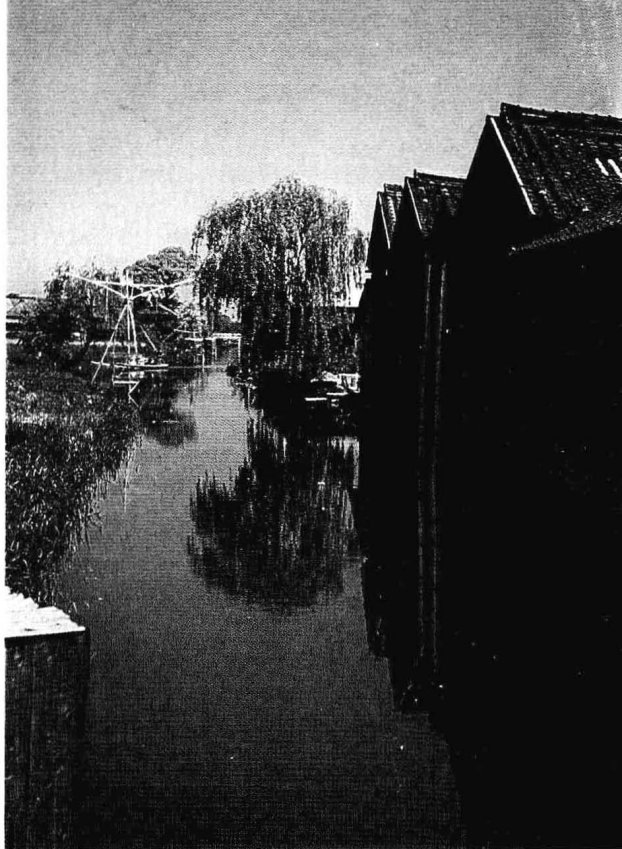
昭和2年ごろ



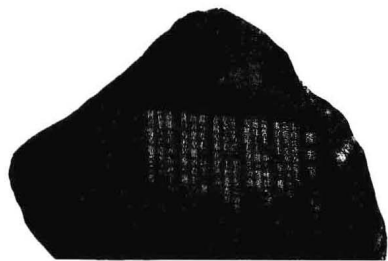
白秋の生家



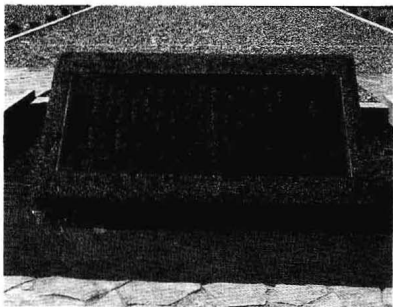
柳川市沖端川



白秋の郷里・柳川の水路

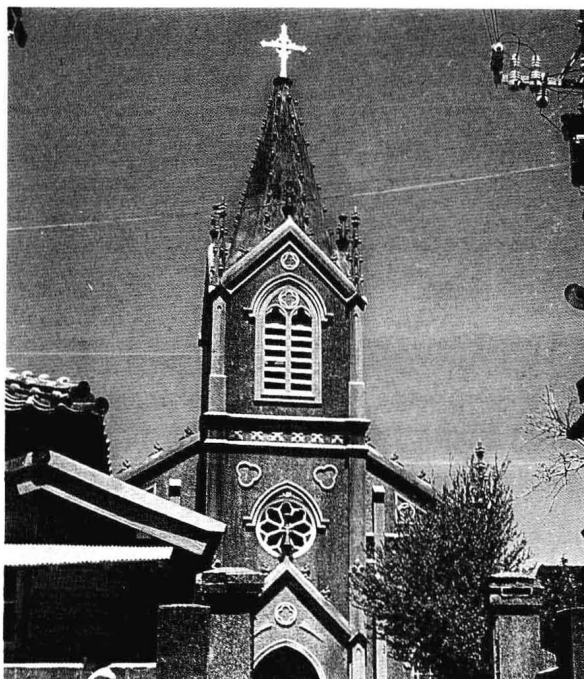


柳川の詩碑



天草本渡市の詩碑

天草・崎津教会



浅間山麓の落葉松林



小田原市伝燈寺

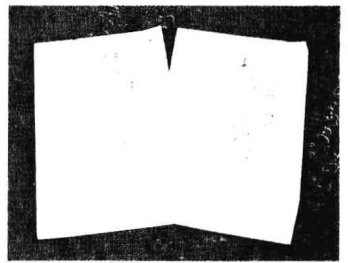


三崎市見桃寺の歌碑



新潟市寄居浜の詩碑

白秋の自筆原稿



三崎市二町谷の海岸



城ヶ島の詩碑



昭和6年、山田耕禪(左)と



昭和7年、鈴木三重吉(左)と



昭和15年ごろ

昭和9年、台湾にて





柳川の生家で(昭和16年)



木俣修夫妻と(昭和16年)

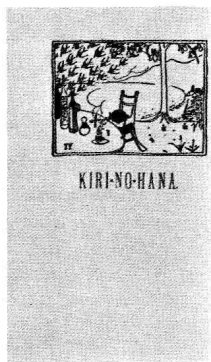
ぼくはと雀もくもく風
 ニろすろ夕空はてふね
 ほつぽつと雀出てくるのこり風、百二十日の夕空はれて「雀の卵」
 しつけかるかくのときを我がいひて黄の豫の夕霧のいろ「豫」



昭和17年、死の直前の原稿



詩人賞の会
 前田鉄之助、河井醉茗、野口米次郎、
 佐藤春夫、堀口大学、佐藤物之助(昭和16年)
 西條八十、春山行夫、堀口大学、佐藤物之助(昭和16年)

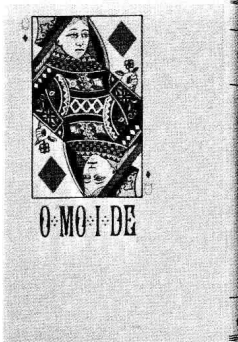
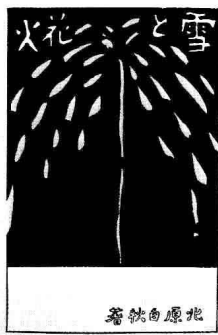


門宗邪

秋白原北



初版本



長浜虎雄制作のブロンズ像



遺品



雑誌「多磨」



多磨墓地の墓



文艺读本

北原白秋



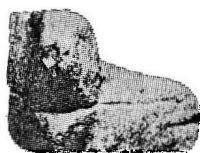
河出書房新社

北原白秋

——我が愛する詩人の伝記

明治四十二年三月、北原白秋の処女詩集『邪宗門』が自費出版された。早速私は注文したが、金沢市では一冊きりしかこの『邪宗門』は、本屋の飾り棚にとどいていなかった。当時、北原白秋は二十五歳であり私は二十一歳であった。金沢から二里離れた金石町の裁判所出張所に私は勤め、月給八円を貰っていた。月給八円の男が一円五十銭の本を取り寄せて購読するのに、少しも高価だと思わないばかりか、毎日曜ごとに金沢の本屋に行つては、発行はまだかというふうに急がし、それが刊行されると威張つて町じゅうを抱えて歩いたものである。誰一人としてそんな詩集なぞに眼もくれる人はいない、彼奴は菓子折を抱えて何の氣で町をうろついているのだろうと、思われたくらいである。

処女詩集『邪宗門』をひらいて読んでも、ちんぷんかんぷん何を表象してあるのか解らなかつた。南蛮風な好みとか幻想とか、邪宗キリスト教に幻妖な秘密の匂いを嗅ぎ出そうとしても、泥くさい田舎の青書生の学問では解るはずがなく、私は菓子折のような石井柏



室生犀星

亭装幀の美しい詩集をなでさすつて、解らないまま解る顔をして読んでいた。ただうろ覚えにわかることは、活字というものがこんなに美しく巧みに行を組み、あたらしい言葉となつて、眼の前にキラキラして来る閃めきを持つこともあるということであつた。こんなに活字が私の好みとうまく融け合つて現われていることで、私はたいへんな物を読んでゐるのだと思つた。この北原白秋という人は自分の頭の中で一遍活字をならべて見て、それがどのように本の中に刷られるかを、ちゃんと見とどけてゐる人だ、そこに驚きと訓えとを詩はまるで解らないままで読みながら、そんな変なものを受け取つたのである。

それから四十七年も経つた今日、『邪宗門』をふたたび精読してみても、邪宗門和曲一連の詩はやはりむかしとおなじで、解らないものがあつた。解つたような解らないものがくり返されて、私をうやむやに印象させた。だが、ことばというものを生みつける白秋のことでは、どういう頭もかなわなかつたごとく、二十一歳の私が活字

の威厳と色彩の発見について、白秋をえらい人だと心に置いたことも今日とかわらなかった。『邪宗門』がちゃんぶんかんぶん解らなくとも、えたいの知れぬ麻葉入りの活字があの中に封じこめられていることだけは、今日の私にも解るのである。

私は白秋編輯であるところの『屋上庭園』という詩の雑誌の広告を見て、それをまた直接白秋に宛て注文した。名もない一青年の注文葉書は、『屋上庭園』の運送によってあるえにしをつないでくれた。これが白秋に文通した最初であつたが、私は『屋上庭園』の詩をよんで見ても、やはり解らないものは解らないままだつた。詩というやつは少々解らない胡麻化しの感じがいるものだというふうに、むつかしい象徴詩の意義とやらの解らない私は、そういう解釈を自分流にしていた。そして白秋の字らしい包み紙のしわを伸ばして、大せつにしまつて置いた。『屋上庭園』は一冊一円の雑誌であつていまだ千円くらいに換算され、田舎のさびしい郵便局でカワセを組んで送金した。たつたこれだけのことで、月給八円もらっている男にとっては大したふんばつであり、そのために詩というものに莫大なつながりが感じられた。『邪宗門』を持つている者は北陸道では私一人であらうし、雁皮紙のように美しい四六倍判六号組みという高邁ハイカラな詩の雑誌『屋上庭園』を購読している者は私一人だったからである。

この『屋上庭園』は木下李太郎、吉井勇、長田秀雄が同人であつたが、第貳号の「おかる勘平」という白秋の詩によって発売禁止になり、第貳号でつぶれた。この年の一月に『スバル』という森鷗外を背景にもった立派で權威のある雑誌が創刊された。白秋の詩が毎号掲載されていて、私はあくことなく愛読した。当時白秋は私より

四つ上の若さで、田舎で遠く眺めているとすでに大家であつて、私など寄りつくことも出来ない隔たりがあつた。

処女詩集『邪宗門』は明治四十二年代にあつて、自費出版の費用は百円ほどかかったと聞いていたが、その年の暮までに福岡県柳川町沖端の酒造業、北原家は酒蔵の火災によって破産していた。白秋の詩集がその前後に出版されていることに、えにししとは言えない。一たいに詩人が第一詩集（処女詩集）を自費で出版するときには、その詩人の家業になんらかの運命風なおとずれが現われているものだ。も一つ自費の詩集を処女詩集と誰がいうともなく言っている、いまだに処女詩集と呼ばれているのは、まだ誰にも読んでもらわれない、はじめて出版されるというほどの、ご念のはいった美しい愛称なのである。小説集などはこれをひと口に初版本といい、処女小説集とはいわれていない。詩集をまもりつづけて来た美名が未だに、ふくいくとして匂いこぼれている所以である。

明治四十四年の五月に第二詩集『思ひ出』が、自費出版ではなく美しい装本となつて、その時代のはなやかな詩歌集出版元である東雲堂という書店から出版された。『思ひ出』一卷にあふれた抒情詩はすべて女の子に、呼吸をひそめて物言うような世にもあえかな詩情からなり立っていて、島崎藤村、薄田泣菫、横瀬夜雨、伊良子清白、河井醉茗、与謝野晶子らの詩境から、ずっと抜け出した秀才の詩集であつた。

私は『思ひ出』から何かの言葉盗み出すことに、眼をはなさなかつた。詩というものはうまい詩からそのことばのつかみ方を盗まなければならぬ、これは詩ばかりではなくどんな文学でも、それを勉強する人間にとっては、はじめは盗まなければならぬ約束ご

とがあるものだ。『思ひ出』の詩がすぐ盗めないのは、白秋が発見したり造語したりしているあたらしい言葉が溢れていて、それが今まで私の読んだものに一つも読み得なかったことである。ただ私が学ぶことの出来たのは、女への哀慕の情というものがこのように寄り添うて、草木山河、日常茶飯事をもうたうものであるということであった。人間に生まれて女を慕わざる若さは存在しない、私の若さも白秋の若さも人間の持つ同じものであるから、女を慕いそれを行う時はこういう隙間や陰からうたうものらしいと、私の盗みはそこから眼をさましかけ、それに勉めたものである。

哀知る女子のために、

われらいま黄金なす向日葵のもとにうたふ。

哀知る女子のために。

○

女子よ、

汝はかなし、

のたまはぬ汝はかなし、

ただひとつ、

一言のわれをおもふと。

明治三十七年白秋は早稲田大学の英文科予科に入学した。その頃家産の傾いた父君、長太郎からの学費には、小判がたびたび送られ、白秋はこれを金に換えて生活の費用にあてた。牛込戸塚、千駄ヶ谷、新小川町、そのほか白秋はたいがい一軒の家を借り、ひとりのばあやに炊事をさせていたが、このばあやは二十年も白秋にかし

ずいていて、白秋もばあやにたよっていたようである。

『思ひ出』は与謝野寛に認められ、雑誌『明星』に発表されたものだが、発行後このように詩集が多く読まれ、たくさん売れた例は少ないであろう。骨牌を表紙絵にしたこの詩集は『邪宗門』で装幀の名人になった白秋が、ふたたび『思ひ出』で装本学の一つの暗示をあてたほどだ。発行者東雲堂主の西村陽吉も歌人であったし、それらの印税で白秋はらくになったに違いなく、郷里からの仕送りも絶えていた頃であった。もちろん、詩人白秋の名声は高まり、三木露風とならんで漸く白露時代を築きあげる芽が吹いていたわけだ。

さて私はやはりぶらぶら金沢にいて本屋の店頭に、毎日いちどずつ現われ雑誌と単行本とを見に行った。明治四十四年頃の私の毎日の日課は一日に一度ずつの、本屋訪問がぬきさしならぬ文学展望のかたちになっていた。私はそこで四六判の横を長くしたような東雲堂発行の『朱楽』という、白秋編輯の詩の雑誌を見つけた。そして私は白秋宛に書きためてあった詩の中から、小景異情という短章からなる詩の原稿を送った。例の《ふるさは遠きにありてうたふもの》という詩も、その原稿の中の一章であった。もちろん、返事はないが翌月の『朱楽』に一章の削減もなく全稿が掲載され、私はめまいと躍動を感じて白秋に感謝の手紙を送った。(ずっと十年も後の年、私が小説を書くようになってから、酒席ではあったが白秋はひととき真面目な顔付で、どうも君くらい原稿の字の拙い男はない、あて字だらけでみみずの赤ん坊のようであるで読めなかったと彼は微笑って言った。では何故掲げたのだときくと、字は字になっていないが詩は詩になっていたからだ、故郷の郷という字も碌にかけない男だと、彼は妙な愛情で私の字の拙いことを心から罵ってく

れた。

次の号にも投稿して掲載せられ、次の次にも掲載されて、私は嬉しく勉強することが出来た。木下李太郎、長田秀雄、吉井勇、斎藤茂吉、谷崎潤一郎、茅野蕭々、萱野二十一の諸氏とやらんで、つらつき一人前になって私の詩がヒナドリのように羽根をびくびく動かしていた。ところが私の活字の隣の頁にふと萩原朔太郎という名前を第四号の『朱樂』にはじめて見て、こんな男の名前を見たことがなかったので、私は詩をほくし読みしてこの男の詩歴をしらべて見た。そしてこの男がはなはだ私にちかひ憂鬱と、故郷前橋市でぶらぶらどろろ息子のからしを嘆いているのを発見して、萩原朔太郎とはなかなか立派な名前だと感心していたが、つぎの号にも萩原朔太郎の詩がけいさいされて、たくさん書きためた原稿から選んで投書した余裕のあるゆたかさがあり、私がいつも先の方の頁に出ている関係から、ムシが知らせるのかこの男の詩を愛誦措かざるものがあつた。ある日突然青い封筒に青い西洋紙の手紙が私の机の上に飛んで来て、君の詩は『朱樂』で毎号読んでいるが、それは抒情詩というものをあらためて皆に示すくらい高いものだといって褒めてくれた。私はすぐ返事を書いてムシの知らせるままこの男と、つまり萩原朔太郎の死去するまで二十七年、八年その友情をつづけた。文士というものは原稿のうえに同じ詩人とか文士をはめるといふことは、よくよくのことでないとお相手方の名前を原稿には書かないものだ、それほど、ようじん深く相手を見つめてから名前なら名前をやっと書くものだ、だが萩原朔太郎はそんなことはお構いなしに私のことを、率直にはめてくれていた。はじめて手紙をくれた日から三十年間にも、少しも滯らずに事があるごとに私を引き立て、名前を

引きずり出して極まりの悪いくらい、友情は厚くその野性は至純なものだといひ、彼の全集のどの頁にも私の名前があるのを見て、みずからようじん深く悪小説家のたましいを抱いて、いまだに、ずるくぬけぬけと生きていることは少々はざかしい思いであつた。私は彼よりも十何年か生きのびている。その十何年間を指折り算えてみて折々大笑し、そしてかえりみて済まんような気がするのである。彼と私とはおたがいムシが知らせ合つたものを、その半生に持ち合ひ照らし合せていたようなものだ。

『朱樂』には大手拓次の詩も間もなく紹介され、白秋の三羽鳥は萩原と大手拓次に私の三人をかぞえた。後年、大木敦夫が白秋の直門になって現われたが、白秋が萩原と私と大手拓次を詩の方で引き出したことは、人の原稿を見分けることでも、なかなかうるさいぐらいに厳格な人であつただけに、やはり眼は人を見分けることに鋭く行きとどいていたのだ。『朱樂』に詩の出た翌年私は京都に上田敏をたずねた。(―藤井紫影の紹介名刺持参―)詩集『海潮音』の著者であり文学博士である上田敏は指環のはまった繊細な手で、ようかんをつまんで無名の私にすすめ、私は文学博士ともあろう人がえらい親切をするものだと思ひ銘した。その上田敏は『朱樂』の私の詩を読んだといつてくれ、意外な光栄を感じた。帰りの梯子段で下げの令嬢をちらと見たが、それだけでも上田敏訪問は私には幸福だった。えらい人を訪ねたのはこれが初めてであつた。

白秋はよく引つ越す人である。私なぞにその都度転居通知など来るはずはない、彼の引越し先につきつきと現われ、一年に二、三

度は訪ねた。部屋は何時でもきちんとかたづけ、机の上には原稿紙でない上質の洋紙が重ねられ、それに詩の下書きがほどこされて、さらにそれを原稿に書きなおしていたのかも分らぬ。冗談もいわずに、手元に引き寄せられて話は熱心にするが、それ以上に女の話などすると、私自身の生活を聴き取ってくれるとか、そういう一さいのうるさい話はしなかった。詩の話、雑誌の話、木下李太郎の話、吉井勇の話、そんなふうなことで話はすぐ絶えてしまつて、私はきゅうくつになり、長居はしないで何時も早々に退去した。つまり顔さえ見ればよかったのだ。どんなに窮していても原稿売込を頼むとか、金銭などは一銭も借りたことがなかった。私はそれだけでも私の幾つもない徳にかぞえていたのだ。他人にはきゅうくつになる田舎書生の私と、いつも高度のハイカラ趣味を持った白秋との、いんぎんにして礼儀のある交際は、そのまま永い間続いた。小説を書いて少し名前が出た時分でも、白秋は以前にくらべて少しばかり敬意を持ってくれただけで、私は例のきゅうくつなものから脱げきれないで、にこにこしながら、いまから考えると彼にたいする尊敬と、きゅうくつなものを最後までまもっていたように思われた。

このあいだ家の娘がいったいお父ちゃんには、小説を書くのに先生がいたのかどうかと、これだけは聞いて置かなければならないというシンケンな顔付で訊ねた。私曰く、お父ちゃんは小説の原稿をえらい小説の大家に見て貰ったことは一度もない、お父ちゃんは小説というものは何時も一人で考えて書いたのだと私は説明した。では詩の先生はいやりますかと言ったから、詩はやはり北原白秋が先生みたいなのだ。白秋が生きている時分は大きな声でいうと、

白秋におべんちゃらを言うているようであかんと思うたが、いまになると萩原朔太郎と私とはなんといっても白秋の弟子だ、原稿の字は一字もなおして貰わなかったが、白秋のたくさんの詩のちすじがからだに入つて、それが萩原と私にあとをひいている、これほど明確な師弟関係はない、白秋も生前にはこの二人を弟子なんぞと言うには、息子が大きくなりすぎているのであればあれの好き勝手にさせて置けばいいんだよと、弟子とは呼んでくれなかった。しかし、おれのほねを拾うやつはこの二人の男だ、あれらはちすじをひくことでは間違いない人だと、白秋は夫人にもそれは言わないで頭に持ったままで、死んでしまわれた。そして一人の兄弟萩原朔太郎も残念にも私より先きに死んで行つた。私はこの伝記だか何だかわからない物をかくために、白秋アルバムと白秋全集を併読しながら写真にある白秋の顔を毎日眺めていた。氣むずかしく優しく、小僧、大きくなつて宜かった、今度はがらになく伝記と来たね、丹念にうまく書けよと、開く頁の先々で顔を見せられた。余り毎日見つけているので極まりが悪く私は頁を伏せることもあった。こういうがらにない仕事を人もあろうに私にさせる『婦人公論』も『婦人公論』なら、こういう機会に毎日白秋に会えるということも、きゅうくつではあるが、今日は何を書こうかという愉しい朝が夜が明ければあった。

その後、たった一度、若山牧水の詩歌雑誌『創作』に、詩の原稿を送ってくれるよう白秋に頼んだが、翌月掲載されはしたもの三段組の投書仲間にはいつていて、私はブルブル震えて怒つた。私はすでに当時生意気にも一人前の詩人になった氣でいたが、若山牧水はまるで私なぞもんだいにしていなかったらしい。白秋をたずねて

三段組の悲哀をうったえたが、白秋はそれだから原稿を他の雑誌に送ることがいやだというのだ、向うには向うの雑誌のなりふりがあるのだからと言ひ、白秋は不機嫌であつた。しかしその翌月号からは二段組になり、一家のあつかいをしてくれたが、白秋が手紙で牧水にそう言ってくれたものであろう。それは白秋だけにたよつて他の雑誌に書かないでいるはずなのが、私のとるべき清節であつたのに、そういう清潔さを知らなかった私の無礼も咎めずに、わざわざ手紙をかいて二段組にするよう、牧水に言ってくれたことも、なかなか出来ないことである。

数多い引越し先の一つである浅草聖天横丁の、あかるい白秋の家の二階家に私はまた現われた。二階に通されると先客があつて、その人は画家の山本鼎であることが判つた。白秋と鼎はほとんど私をそっちのけにしたしげに話し合つてゐた。私はそこそこに辞去したが、その折、山本鼎はいま来た男はナカナカの面つきをしてゐるね、文学青年なんてみんなああかね、あんな食えない面つきの青年なんて見たことがないね、と、山本鼎は画を勉強している生活に余裕のある青年との比較論をしたと、白秋は後にこのことを私に話してくれ、これほど参つたことは前後を通じてなかった。それ以来、山本鼎の名が手厳しく印象されたが、私が小説を書く前後に山本も『中央公論』に年に二回くらい小説を書いてゐたが、決して他の雑誌には執筆しない義理堅い作家であつた。ある年のある日ある宴会の席上で山本鼎に行き合つたが、彼の曰く、この頃君の「まむし」という小説を読んだが、面白くて遂に再度読んだと正直に言われ、頭を搔いて私は赧くさえた。あんなたちの悪そうな青年なんて見たことがないと言つたその人が、再度もそのたちの悪い男の小説

を読んでくれたという事で、すっかり私はたちの悪そうなどという言葉を訂正されたようで、よくふつた山本鼎の寛容迫らざる人だらを思ひやつた。

私はちすじ（血統）という言葉をもこの原稿の中でつかつたが、文学のうえのちすじというものは、何かの弾みにその子孫にあらわれるものらしい。白秋の令妹家子さんは十九歳で上京され、白秋の親友山本鼎と結婚した。一子を得て太郎と名づけられたのが、父君すでに亡きこの頃、新鋭の詩人としても注目されている山本太郎のことであつた。近作『みみずの歌』はみみずの世界の哀しみにことよせ、人間の世界に及んだものだが、私はこの詩をよんで父君山本鼎と、母親の兄さんである北原白秋から継いだ血すじに、あらそわれぬ文学のあらわれが、あさがおの白い花をしぼりに見せる種子の微妙さを感じさせたほどだ。森鷗外の令嬢茉莉子さん、その妹さんの小堀杏奴さんなども、父君鷗外の碩学の堅さとは反対の柔らかい文学のおしえを、いつの間にか受けていられてゐる。横山美智子の令嬢の場合はかたがちがうが、やはり踊りも文学のあらわれ方が違つてゐるとはいへ、横山はるひの出現もいみじいものであつた。こう考へて来ると新鋭の詩人山本太郎の詩の世界は、一等直系的でまづつぐに白秋の行けなかつた所を行こうとしてゐる。親子二代ではないが何か親子二代の詩人というふうに考へると愉しくさえるのである。

話はあとさきになるが大正二年かのある日、私は麻布にある白秋の家をたずねたが、玄関に令妹家子さんが出て来られ、このひとが